

我々はどこから来たのか 我々は何者か 我々はどこへ行くのか¹

— 市川康則氏講演『福音主義神学の基盤を点検する』への応答 —

遠藤 克則（神戸神学館・実践神学担当）

1. JETS創立の背景と目的（市川氏）

“・・・福音（主義）理解とその継承のために、JETS創立の背景と目的を確認することは重要、かつ実際的にも近道である。”（市川氏）

JETS規約より

第三条（立場） 「本会は聖書の十全靈感を信じる福音主義キリスト教の立場に立つ。」

第四条（目的） 「本会は前条の立場に立って、神学的研究を行い、相互の交流をはかり、教会の健全な成長と発展に奉仕することを目的とする。」

<誤表示（あるいは偽装！？）>とならないように

➤JETS規約において<福音主義>の定義はない。そして、市川氏が述べるように、<福音主義>を定義することは容易ではない。（同氏は“不可能”であるとさえ言い直す！）ところが、既に、私たちは<福音主義>を冠する学会の会員であり、たとえ日本のようなキリスト教が少数派のなかの少数派であるような社会においてであってもそれが何らかの“看板（ラベル、ID）”となっている以上は、その定義を曖昧なままとすることは責任ある態度ではないと考える。²

2. “福音主義”の意味合いをもとめて一反福音主義との対峙において（市川氏）

“「福音主義」理解（概念規定）については、傾向として、最大公約数的な捉え方（例えば、古代四大公同信条および宗教改革諸信条の共通点に注目）と 最小公倍数的な捉え方（細部に亘る一致を追及）があるように思われる・・・”（市川氏）

<公同信条と宗教改革諸信条>

➤ JETS のアイデンティティーの根幹から前者の“最大公約的な捉え方（古代四大公同信条および宗教改革諸信条の共通点に着目）”が消えるならば、<福音主義>を論ずることも不可能になろう。もっとも、創立以来 “聖書信仰”³ が 所属会員のコンセン

¹ 故フランシス・シェーファー(Francis A. Schaeffer)のドキュメンタリー映画『それでは如何に生きるべきか (How should we then live?)』(1977年)でも取り上げられていた ゴーギャン(Paul Gauguin)の絵画名 *D'où venons-nous? Que sommes-nous? Où allons-nous?* (1897-1898) より。

² 山田ブーニー氏は『あなたの話はなぜ「通じない」のか』(筑摩書房、2003年)で、情報の伝達においては情報を伝える媒体の信頼度(同氏は“メディア力”と呼ぶ)がいかに重要であるかを論じた。<福音主義>という“看板(ラベル、ID)”を冠する団体や運動に関わる者たちが、実はその意味を理解せず、その立場に賛同していないなら、<福音主義>はその“メディア力”を低下させることになりかねない。

³ イングランド教会内の福音主義者であるアリスター・マクグラス博士などにより、福音主義におけるとりわけ米国のオールド・プリンストン由来の聖書観に対して批判が出されている。Cf. Alister E. McGrath, *A Passion for Truth*. (Apollos, 1996) p.166-174 尚、本邦においても JETS 創設期からの会員だった村瀬俊夫氏は、『福音主義神学』誌(41号、2010年)に収められたエッセー「聖書論争をめぐる視点からの個人的所見」において、

サスの核であった JETS において、⁴ 後述する〈宗教改革の “五つのソラ”〉の
ように それ以外のテーゼも含む “最大公約的な捉え方” が はたして共有されている
のかが確認される必要はある。

- また、後者の “最小公倍数的な捉え方（細部に亘る一致を追及）” は所属会員の
教派的背景の多様性を見る限り、 JETS ではあまり想定されていなかったかも
しれない。けれども、まさに、その部分でこそ、各々の教派的背景の真理契機を
お互いが学び合える建徳的な神学的議論（ディベート）が可能であろうし、
“親睦会” ではなく “学会” を標榜する以上、それは必要でさえあろう。⁵
- とすれば、まずは、前者の “最大公約的な捉え方” について、〈五つのソラ〉と
呼んでいる 宗教改革の特色を凝縮したテーゼで JETS が自己吟味することは、
後者の “最小公倍数的な捉え方（細部に亘る一致を追及）” も射程に入れつつ、
“我々はどこから来たのか 我々は何者か 我々はどこへ行くのか” を探求する
ために重要でないだろうか。

〈宗教改革の “五つのソラ” 〉

① 聖書のみ (sola Scriptura)

創立以来、所謂 “聖書信仰” が 所属会員の主たるコンセンサスであった
JETS において、“聖書信仰” の定義そのものも丁寧に再確認する必要が
あろう。 というのも、それは、ときにビブリシズム的傾向、ときに教理
(組織神学) への警戒感を生み出してきたのかもしれないからである。⁶

② 信仰のみ (sola fide)、 ③ 恵みのみ (sola gratia)

ルターは〈信仰のみによる義認〉こそ 教会が立つか倒れるかの教理であると
語ったとされている。が、近年、この教理に関して福音主義陣営内部からも
“物言い” が出ていることについては、昨年秋の JETS 西部部会の会議でも
とり上げたとおりである。⁷ 宗教改革者たちの救済論（もちろん義認論も
含めて）を改めて学ぶ必要があるだろう。⁸

④ キリストのみ (solus Christus)

上記の “物言い” とも関連している立場から、福音主義におけるキリスト
理解に再考を促す書籍の邦訳も最近刊行されている（例：スコット・マク

“聖書信仰” という表現への違和感を表明している（同誌 106 頁）。

⁴ 今回の研究会の〈ご案内〉に記載された正木牧人氏による “主題の趣旨説明” を参照されたい。

⁵ 幸いに、JETS においてもとりわけ私ども西部部会は、そのエリアに複数の教派立神学校も存在しており、
切磋琢磨（英語でいう、“Iron sharpens iron.”）の機会に恵まれていると考えられないだろうか。

⁶ 日本の福音主義陣営において “聖書信仰” が語られるときに、〈聖書のみ (sola Scriptura)〉の陰に隠れがちな
〈聖書全体 (tota Scriptura)〉がどのように理解されていたのかも精査される必要があるだろう。

⁷ http://www.evangelical-theology.jp/jets-hp/jets_west/20121119_jets-w_NPP_all.pdf

Cf. Ryan Glomsrud & Michael Horton (eds), *Justified: Modern Reformation Essays on the Doctrine of Justification*.
(Modern Reformation, 2010)

⁸ A. E. マクグラス著『宗教改革の思想』（教文館、2000年）163-164頁。尚、近年カルヴァンの
神学における “キリストとの結合” と義認との関係に注目が集まっており、その一例としては次のものがある。
Mark A. Garcia, *Life in Christ: Union with Christ and Twofold Grace in Calvin's Theology*. (Paternoster, 2008)

ナイト(Scot McKnight)著『福音の再発見 (*The King Jesus Gospel*)』キリスト新聞社、2013年)⁹ とはいえ、このような問題提起は、既にスコットランド教会の福音主義者として活躍した故ウィリアム・スティール 牧師の1965年の講演においてもなされていた。その講演で、スティール牧師は、福音主義者の語る〈福音〉が矮小化されていて、〈御言葉全体〉が説かれていないのではという鋭い指摘をしていた。¹⁰ この点においても、古代教会の公同信条を生み出した教父たちの積義と神学や宗教改革者の積義と神学から学ぶことは有益であろう。¹¹

3. 福音に生かされる—福音主義の本質 (市川氏)

“福音主義とは端的に福音を固守すること、・・・福音それ自体の要求に従うこと—それに生かされること—を伴う(むしろ、そのために福音を知的に正しく知ることが要請される)。” (市川氏)

⑤ 神の栄光のみ (soli Deo gloria)

私たちの信仰も生活も—無論、礼拝も伝道・宣教も神学的研鑽も—〈神の栄光〉のためにあるのだ。¹² (Cf. ローマ書 11:36) ピューリタン神学者ウィリアム・エイムズ(William Ames)の言葉を借りるなら、“神学とは、神のために生きるための教理であ[り]”¹³ 故D. M. ロイド・ジョーンズ(D.M. Lloyd-Jones)の言葉にあるように、“私たちの関心は真理と生きておられる神様とにある。”¹⁴

S. D. G.

⁹ 著者は、N. T. ライト(N. T. Wright) 主教の言説に依拠しつつ、パウロのいう〈福音〉は宗教改革者たちから現代福音主義に至るまで誤解されてきた、とさえ論じる。(同書76-85頁を参照。)

¹⁰ ウィリアム・スティール(William Still) 著 松谷好明訳『*牧師の仕事 (The Work of The Pastor)*』85-91頁、120-126頁

¹¹ 宗教改革期からの例を挙げるなら、ストラスブールのマルチン・ブーツァー (Martin Bucer) が、晩年イングランドに亡命し国王エドワード六世(Edward VI)に献呈したのが *De Regno Christi* (キリストの王国)であったし、キリストの王職は『*ウェストミンスター信仰告白*』の第8章でも記されている。時代は下り、春名純人氏は『*思想の宗教的前提*』(聖恵授産所、1993年)で、「・・・近代神学は、創造論よりも救済論の性格を強め、心の問題に閉じこもり・・・」(201頁)と記述し、近代神学のなかに福音主義とも共通する問題を見ている。ひょっとしたら(ポスト宗教改革の正統主義への反動の側面もある)敬虔主義の負の影響が、近代神学と(現代の)福音主義の双方に流れ込んでいるためなのだろうか。そして、敬虔主義の負の影響との関連では、水草修治氏がその著書『*神を愛するための神学講座*』の紙版の146頁で、かつて“教理ではない、祈りだ!”と力説しつつも、ついに自由主義神学に影響されていったとある教派の事例を挙げている点も示唆に富む。

¹² ヨハン・セバスチャン・バッハは自作の楽譜に〈神の栄光のみ〉を意味するラテン語の頭文字 ”S.D.G.” を書き込んだと言われている。また、『*ウェストミンスター教理問答 (大・小)*』の問1は、人の主な目的は神に栄光を帰すること(to glorify God)であると説く。

¹³ Guilielmus Amesius, *Medulla Theologica* [英訳すると *The Marrow of Theology*]. (Li.1): “Theology is the doctrine of living onto God.”

¹⁴ Iain H. Murray, *Evangelicalism Divided: A Record of Crucial Change in the Years 1950 to 2000*. (Banner of Truth, 2000)の背表紙より。ロイド・ジョーンズ曰く、“We are not interested in numbers. We are interested in truth and in the living God.”